

「――結婚式？」

駒を一つ進めながら言ったアズールの言葉に、イデアは首を傾げた。

「ええ。母の知り合いの結婚式で……実家のレストランにもよく来てくださる方で僕も多少付き合いがありましたので、ぜひ来てほしいと招待を受けて」

「ほおーん」

「なので、申し訳ありませんが今週末は……」

今週末。イデアとアズールは二人で麓の街に、かねてから予約していたボードゲームを取りに行く予定だった。

正直なところ、デートだ、とイデアは浮かれていた。学園を出て、バスに乗って、二人で麓の街へ行くなんてそれはもうデートだ。ボードゲームを受け取ったら店内にある他のゲームも見て回って、きつとアズールはカフェなどを覗きに行きたがるだろうからそれに付き合って……。何を着て行こう。あまりキメすぎても恥ずかしいが、だからと言って部屋着のような恰好で出向くわけにもいかないし……。ここ数日、イデアの頭の中はそんなことではないだった。

けれど、そんな悩みは、アズールの申し訳なさそうな断りでもって、たった今すべてなくなってしまった。

イデアのついた落胆の溜息をどう受け取ったのか、アズールはもう一度「すみません」と言う。待つて、そんな顔をさせたいわけじゃない。

「あー、いいよ全然。どうせボドゲ受け取って帰ってくるだけだし、オルトと行ってきますわ」

焦って早口で言えば、アズールはほっとしたような顔をした。表情がふわりと和らいで、イデアも安心する。

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

あー可愛い。思わず緩みそうになった口をイデアはきゅっと引き結んで駒に指を伸ばした。盤面を見れば、大いに分が悪い。なんとか見つけた隙に駒を置けば、アズールはすぐさま微笑みを消して盤面を睨みつけるようにした。可愛いお顔が台無しで、そういうところも、とてもかわいい。

「……あー、あの、人魚の結婚ってことは、あの、アレ……？ エ、エタ、なんちゃら、みたいなやつ？」

「エタニティフロートですか？」

「アッ、そ、そう、それ……エタニティフロート」

「よくご存じですね？」

アズールは顔をあげ、不思議そうに首を傾げた。アイデアは慌てて弁明するように両手で宙をかき混ぜる。

「アッ、いやっ、あのー、うちの研究室で、群青の街、だっけ？ あそこの出身の人がいて、それで、なんか子どもの頃、聞いたことがあるなあー、なんて」

「なるほど。……嘆きの島には、他の国の出身者の方もいらつしやるんですね」
「う、ウン、ソウ……」

嘘だ。いや、まるきりの嘘というわけではない。陽光の国出身者の研究員は確かにいるにはいた。けれどその人が群青の街出身かどうかをアイデアは知らない。もちろん、その研究員からエタニティフロートの話を聞いたというのは完全な嘘だ。

アイデアが自分で調べた。

なぜって、アズールのことを、好きになってしまったからだった。

ほんの出来心だ。そういえば人魚って人間と結婚とかできるのかな、という、最初はシンブルな疑問だった。文化風土や婚姻制度を調べれば、その風習には簡単に行き当たった。愛する二人に課せられる、真実の愛の試練――。

……きつしよ。あまりにもキショすぎる。自分がだ。アズールは別にアイデアの恋人じゃない。告白だっしてしていないのだ。するつもりも――する勇気も、ない。どうせ望みがないな

んてわかりきっているからだった。それなのに結婚式のことまで勝手に調べて妄想しちゃってるなんてキモすぎるだろ。ドン引き、草。先輩それってセクハラですよ……ハァ。

アイデアは深々と溜息を吐いた。

駒を置き終わったばかりだったアズールは、その溜息を盤面に向けられたものだと思ったらしい。ドヤ顔をして駒を反らしている。ちくしょう、かわいいな。

「エタニティフロートは、人間と結婚する人魚限定の風習です。今回は人魚同士の結婚なので、海の中の、普通の結婚式ですよ」

「あ、そ、そうなんだ……へえ……」

「……でも、一度は参列してみたいものですね。エタニティフロート」

ぽつりとこぼされたその言葉に、アイデアは顔を上げた。盤面はいまだ劣勢で、アイデアは動かす駒を考えあぐねている。

「……興味、あるの？」

「ええ。陸にあがった人魚なら誰でも憧れるものです。伝承に倣った愛の試練……面白そうじゃないですか？」

——じゃあ、僕としてみる？

なぐぐぐんてことが言えたら陰キャ代表やってないんだよなあ！ イデアはぐつと奥歯を噛んで、盤面を睨みつけて駒を掴む。どう足掻いても数手先で詰み。わかっているのに降参できないのはもう少しこのゲームを君と続けていたいから、なんて、あまりに愚か。

アズールはエタニティフロートに興味があるのか。そうか。それっていったいどういう意味なんだろう。やってみたいとかそういう話？ だったら相手ってイデアでもいいということにならないだろうか。何せイデアはアズールを好きだし、髪は燃えているけれど一応陸で生きている人間だ。将来結婚するとして、アズールの仕事を邪魔したりだつてしないし、それどころかシステム面でのサポートだつてできる。曲がり間違つても「アタシと仕事どっちが大事なの？」なんて言ったりしない。まあ問題があるとすればイデアがクソキモ陰キャ童貞ということであつて、そんな奴と結婚したいわけないだろうって？ それはね、そう。お呼びでない。これは失礼しました。

それとも、もしかして。

「……ねえ、それって」

「え？」

「……………いや、なんでもない」

もしかして、結婚したいと思つている特定の誰かがいるの。

その言葉をイデアは飲み込んだ。喉の奥、胸のあたりが重たくつかえる。

結婚したい相手がいるのだろうか。もしかしたらもう、結婚を視野に入れるような、そういう関係だったりするのだろうか。

ねえそれって女？ 男？ どんなやつ？

けれどそんなことを聞けるわけもなく、アイデアは力なく持ち上げた駒を盤の上に置く。あとという間にそれは詰んで、アイデアはあっさりゲームに負けた。



オクタヴィネル寮の談話室、ソファの上にどさりと鞆を置いたアズールを双子の片割れが見上げて言った。

「どうだった？ ホタルイカ先輩、なんか言ってた？」

「……何も」

アズールの短い返答に、フロイドは「えー！」と子供じみた声を上げる。

「じゃあ作戦失敗？ エタフロの話できなかったの？」

「それは……しました。エタニティフロートに憧れているという話だってちゃんとしました」

「それで進展なし？ 『陸の人間との結婚に憧れていることを匂わせれば、イデアさんはきっと僕を意識するはずです』ってあーんなにはりきってたくせに。やっぱアズールの勘違いなんじゃねーの？」

「そんなはずがない！ イデアさんは絶対に、僕のことを好きはずです！」

そう、イデアは、アズールのことが好きはずだ。少なくともアズールの見立てではそうに違いなかった。

でなければ説明がつかない。他の人に対してはぼそぼそとどもった話し方をするか、タブレット越しにしか喋れないくせに、アズールに対しては楽し気に話しかけてくるあの姿。子供のように意地悪く煽ってきたかと思えば、年上ぶった優しい声でアズールを助けてくれたりするあの態度。

何より、あの、とろけるような瞳！

あれが恋をしている瞳でなくてなんだというんだ。人魚は恋にうるさい生き物だ。あれは絶対、絶対絶対、アズールに恋をしている瞳に決まっている！

アズールはアイデアのことが好きだった。けれどそれは、アイデアがあんな腫でアズールのこのを見るからだ。とろけそうな顔で笑って、優しい声で名前を呼ぶから、だから好きになっ
てしまったのだ。

これで、アイデアがアズールのことを、別に好きでもなんでもないだって!? そんなことあるわけがない。あつていいはずがない。

「だいたい、どうしてよりによって今週末なんだ……。せつかくの、アイデアさんとのデートだったのに……」

荷物の横に倒れこむようにして嘆くアズールを、フロイドがおかしそうに見下ろす。声を聞きつけやってくるジェイドもそれを見て、楽しそうにニヤニヤと笑って言った。

「残念でしたねえ、アズール。服もあれだけ熱心を選んでいたのに」

「でもボードゲーム取りに行くだけでしょお? それってデートなわけ?」

デートに決まっているだろう! アズールは拳を握った。あのアイデアと二人で学園の外へ出かけるなんて、デート以外のなんでもない。できればボードゲームを受け取った後、他のゲームを眺めたりもしつつ、きつとアイデアは疲れたと言い出すだろうからおしゃれすぎないファストフード店で軽食を食べたりして……。そんなことをアズールはずっと考えていたのだ。

けれど突然入った予定でそんな計画も水の泡だ。せめて結婚というワードでアイデアに意識をさせられれば、と思ったが、それももうまくいかなかった。

エタニティフロートのことを、アイデアは知っているらしい。興味があると言ったアズールのことをどう思っただろうか。まったく少しも顔色を変えず、その目は盤上に釘付けだったけれど。

あなたとエタニティフロートをしたいです、と、言えればよかったのだろうか。

再びソファに倒れ伏したアズールに、双子の楽しそうな笑い声が降った。

結婚式は素晴らしかった。クラゲの人魚である花嫁は幸せそうで、鮫の人魚である花婿は少し緊張をされていて、参列者は皆あたたかく二人の門出を祝った。

花嫁はアズールが幼い頃から母のリストランテに通ってくれていた客だったので、陸に上がったまま減多に海に帰らないアズールの参列を心から喜んでくれた。

「あなたの結婚式にもぜひ出席させてね」

そう言って花嫁は、アズールにブーケを手渡した。深海でも持てるそれは造花で、陸の文化が好きな花婿によって用意されたものだ。

「ありがとうございます」

そつのない笑顔でそれを受け取りながら、アズールの胸中が静かに落ち込む。

結婚。結婚式。

アズールのそれは、陸で行う予定だ。……いや、予定なんて確かなものじゃない。アズールはまだ学生だし、そもそもそれはアズールの希望、願望にすぎない。

思い描くそれには、必ずイデアの姿がある。ポートをひっくり返そうとする二匹のウツボ。大騒ぎしながらポートにしがみつくイデアと、それを笑う自分の姿。アズールの思い描く幸せな結婚式。

けれど、イデアがアズールのことを好きだというのは、フロイドのいうようにアズールの勘違いなのかも知れなかった。あれから特に、連絡を交わしたりはしていない。今日の予定をデートだと楽しみにしていたのもアズールだけで、イデアは別に、麓の街に一人で行くのが嫌だったただけなのだ。アズールが来られないならオルトを連れて行けばいい。イデアにוותはきつと、それだけの話。

暗く沈みそうになる思考を振り払うようにアズールが首を振った、そのときだった。

「あの……アズール？」

控えめに名前を呼ばれ、アズールは振り返る。

そして、目を見開いた。どくん、と心臓が鳴る。

「ひ、久しぶり……元氣だった？　すごくきれいになって、びっくりした。あの、俺のこ
と、覚えてる……？」

——これだから、海に帰るのは嫌なんだ。

話しかけてきたその人物は、ミドルスクール時代の同級生だった。アズールをいじめてき
た人魚ではない。ではないが、いじめられていた時の、アズールを知っていることに変わり
はない。

無様で醜いあの姿。泣くことしかできなかったあの頃。

「あの、突然で、びっくりするかもしれないけど、……俺、昔から、君に憧れてて……」
アズールの目の前が暗くなっていく。憧れていた？　昔から？　馬鹿なことを言うな。そ
んなことを言って、どうせ自分をからかうつもりに決まっている。だいたい一体何に、憧れ
られるというのだ。あんな、あんな——……。

「写真、撮ってもらえないかな？　一回だけでいいんだ」

「あら！　じゃあ撮ってあげるわ。アズールくん、そこに並んで」

真っ黒に渦巻く思考に飲み込まれ、思わず逃げ出しそうになったアズールを止めたのは、
明るい花嫁の声だった。

アズールははっと顔を上げる。花嫁はにこにこと人の好きそうな笑みを浮かべて、アズー
ルを見ながらその同級生の隣を指さしている。

結婚式の、めでたい席だ。ケチをつけるわけにはいかない。

仕方なく隣に並んだアズールに、名前も覚えていない同級生は緊張したような、嬉しそうな顔をした。笑顔を促す掛け声をかけられたので、アズールは、一分の隙も無い完璧な笑顔を顔面に貼り付けた。

同級生は楽し気に興奮したような口調で何かを喋っている。きれいで、憧れていて、強く、きみのことが、すきで。

けれどその言葉はちっともアズールの耳には入らなかった。笑みを貼り付けたまま花嫁に礼を言い、同級生にも定型通りの挨拶をして、ブーケを抱えてその場を去る。八本の足で懸命に海を掻いて。すこしでも早く、なるべく遠く。

帰ろう。すぐに陸にあがろう。変身菓を飲んで、学園に帰って、それから……それから。無性に、イデアに会いたかった。



結婚式ってどうだったの、と聞けないまま、部活の時間が終わってしまった。

オルトと一緒に取りに行ったゲームは大満足の内容だった。もともとアイデアとアズールが気に入っているゲームのシリーズ新作だ。だからこそ予約までして、麓の街まで取りに行く予定だったのだ。

ゲームは確かに楽しかった。けれど、遊んでいる間ずっとアイデアは、アズールの週末の話を聞きたくて仕方がなかった。

いや、本当に聞きたいのか？ 聞きたくないのかもしれない。海に帰って誰と会ったの。たとえば昔馴染みと話が弾んだりしただろうか。

好きな相手がいるのだろうか。この前からアイデアの頭はそればかりに占拠されていた。エタニティフロートに憧れているとアズールは言った。それはどういう意味なのだろう。結婚を、陸でしたい？ それって具体的に、好きなやつがいるってこと？

聞きたいが、聞けるわけなんてない。じゃんけんに負けてゲームの箱を片付けに行ったアズールの背をアイデアはぼんやりと見つめる。

そのときだった。小さな振動が机を揺らす。視線を向ければ机の上に置き去りになっていたアズールのスマホが震えているのだった。

アイデアがそれを見たのは偶然だ。別に盗み見るつもりなんてなかった。ただ、画面に無造作に表示された通知に、その画像が表示されていただけ。

「……は？」

アズールの写真だ。人魚の姿をしている。

誰かと並んで映っている。笑みを浮かべて。

「……ちよつと！」

戻ってきたアズールが、画面を見つめるアイデアの前からスマホを奪った。

「何勝手に見てるんですか」

「見られたくないなら隠しときなよ。……誰、そいつ」

「……あなたに、関係ないでしょう」

アズールは顔を背ける。スマホを、写真を、背に隠すようにしたその動きが、アイデアを苛立たせた。アイデアでは呼吸のできない海の底。デートの約束を反故にしてまで向かったそれ。

浮かべた笑み。近い距離。

アズールの肩をぎこちなく抱くように、伸ばされた腕。

ここ数日、アイデアの脳裏をぐるぐると回っていたすべてが、それで全部爆発した。

「……そいつと結婚したいの？」

「……はあ!？」

「いやでもエタニティフロートに憧れてるって言ったよね!？ あれって陸の人間と人魚との結婚なんでしょ？ え、だったら誰？ そいつは本当は人間で家族に会わせるために海に連

れて行っただかそんなわけじゃないよね!? そいつ以外にも君といい仲の奴がいるってこと……? 誰だか知らんけど、君はその誰かと愛の試練を乗り越えたいんだ? ……そっか……ねえ、その式にはもしかして参列者として僕も呼ばれたりするってわけ? はは……嫌だ……そんなの、絶対に嫌だ」



一息に言って、そのまま床にしゃがみこんでしまったアイデアをアズールは茫然と見下ろした。

青い炎が一塊になっているようだ。寄る辺ない子どものように膝を抱えてしまって、きれいな青い炎が床に広がっている。

何を言われたのか、わからなかった。怒っているような口調だった。そいつと結婚したいって、何の話だ。何が嫌だと、アイデアは言った?

アズールの結婚へ参列するのが嫌だと、そう言わなかっただろうか。

背中に隠したスマホを見る。アイデアが食い入るように見つめ、突然怒り出したそれ。忌まわしき同級生とのツーショットを、母親経由で花嫁は律儀に送ってきてくれたのだった。

これを見て、アイデアは怒った。
どうして。

「……ねえ、アイデアさん」

アイデアの前にしゃがみこむ。足の間に額を引っ付けて丸まってしまっているアイデアの顔はアズールからは見えない。アズールはマジカルペンを振った。使うのは、簡単な呼び寄せの魔法。

呼び出したのは、部屋に飾っていた造花のブーケだ。結婚式で花嫁から渡されるブーケは、陸ではバトンの意味を持つ。次の結婚はあなたよ、という。

海に生きる花嫁はそれを知らなかったかもしれない。けれどアズールは知っている。
陸で生きると決めたから。

「僕、エタニティフロートをしたいと思っています」

「……わかってるよ」

「それは、相手が、陸の人間だからで」

「だからわかってるって！」

苛立ったようにアイデアが顔を上げた。目が涙に潤んでいる。

ねえやっぱり、僕のことを好きなんですか。そう聞く代わりにアズールは、イデアに花束を渡してこう言った。

「イデアさん、僕と、エタニティフロートしてくれませんか？」

アズールの言葉を飲み込むためのしばしの間を置いて、イデアの髪が一気に桃色に弾けた。花火のようにばちばちと燃え広がって、同じようにイデアの顔も赤くなる。

「それは僕のセリフなだけ!?」

ブーケを握りしめながらの情けない叫び声あまりに可愛くて思わず笑ったアズールの腕をイデアが掴んだ。そのまま勢いよく引っ張られてアズールはあっさりバランスを崩す。陸の重力そのままに、アズールの身体はイデアの腕の中。

造花のブーケに香りはない。ただ、イデアの匂いがする。あたたかい、優しい匂いだ。

「アズール氏、……僕と、いつか、エタニティフロート、して」

「……はい」

アズールはゆっくりと顔を上げた。頬が熱いから、きっと顔は赤くなってしまっているだろう。同じように顔を赤くしたイデアがアズールをじっと見つめている。

なんとなくそういうことかな、と思って目を閉じたら、「えっ!? あ、あ……君さあ……」という声があった。

けれど、間違えたのかと焦ったアズールが目を開けるより先に、唇にやわらかなそれが触れて――ガチッと音がして歯が当たった。

「……うっ……！！ 最悪だ……！！」

「……人にキスをしておいて最悪とは何です」

「ちがつ、そうじゃなくて！ ……順番もめちやくちやだし、き、キスだってもっと、うまくできるはずだったんだよ！」

可愛すぎる君が悪いんだ、とあまりに無茶苦茶な責任転嫁をしたアイデアの手が、それでも優しくアズールの頬に触れる。指先がかすかに震えている。

「……ねえ、好き。僕と、付き合ってください」

返事をするのが先だとわかっていたけれど、アズールはもう一度目を閉じた。呻き声とため息のあと、今度はゆっくりと吐息が、唇に触れる。
決まり切った返事は、キスのあとでもいいだろう。